

思想・文学研究とフランス語教育

飯野和夫

名古屋大学大学院国際言語文化研究科

名古屋大学教養教育院フランス語科

私の研究

- 私の専門: 近現代フランス思想
- そもその専門: 18世紀フランス思想、感覚論哲学(コンディヤック、ボネら)
- 研究フィールドを現代にも広げている理由。
- 第一に、18世紀フランス思想研究は18世紀の思想家の著作を読んでいるだけではすまない。感覚論哲学者コンディヤックの研究を飛躍させたのはジャック・デリダ。デリダが43歳の時のコンディヤックについての小著がコンディヤック研究を一新。デリダのコンディヤック論を理解するには、デリダ自身の思想も理解しないわけにはいかず、デリダも学ぶことを求められた。
- もう一人フランス18世紀を研究フィールドにした現代の哲学者: ミシェル・フーコー。有名な「古典主義時代」という用語が指すのは、フランスを中心とするヨーロッパの17-18世紀。18世紀思想を研究しようとして、フーコーを学ばないわけにはいかない。彼の著作の多くは17-18世紀の社会史のような性格。思想史研究と直接の関係を持つのは『言葉ともの』。
- さらに、世代的問題もあり、学生時代から現代思想には親しんでいた。

国際言語文化研究科での授業

- ・私のフランス18世紀思想と現代の思想の研究を後押ししてくれたのが、私が所属する国際言語文化研究科。
- ・この研究科は現代を志向。フーコーら現代の思想家を授業で扱うことができた。
- ・実際には、フランス語を使って専門的に現代フランス思想を学ぼうという院生は減少。近年は日本語で講義形式の授業。
- ・講義を通じて、受講生と一緒に考え、私自身も勉強。

フランス文明の探究？

- 近現代フランス思想の研究
――いわゆる「フランス文明 civilization française」の一角を探求するもの
- もちろんフランス思想の内容はフランスを超えた普遍性を持つ
- 他方で、フランス思想はフランス文明という背景の中で生み出された
- ヨーロッパ文明ではないのか？
文化、思想、発想法は言語と関係する面があり、<フランス語によるフランス文明>という単位は重要
- フランス文明は、フランスとその周辺の地で、フランス語を道具として花開いた文明。
時間の中でその姿を徐々に変えていく。
- 外国人がフランス文明を教えられるのか？
当該の文明の中にいる人が気づかないフランス文明の特徴などを、学生に伝えることはできる。
- 他の日本人の先生方も同じ。その人なりのフランス文明に対する見方。

フランス語

- フランス語。フランス文明の重要な構成要素。フランス思想・文学の媒体。
～フランス語は私の研究の極めて重要な部分。
私の研究歴は、大学に入ってから始めたフランス語との格闘の日々。
母語ではないフランス語の勉強は今日まで継続。
- 個人的には作文、会話能力ともネイティブに太刀打ちできない。
ただし、外からフランス語を眺めている分、ネイティブなら気にしないようなフランス語のいろいろな問題点を、日本人を中心とするフランス語学習者に理解させることはできる。
日本人の他のすべての先生方も同様と思う。日本人教員の中で、思想・文学系の私には私なりのフランス語の教え方がある。

名古屋大学の言語文化科目―「文化事情」

- 名古屋大学の、学部一、二年生向け第二外国語(未修外国語)教育。
～「言語文化科目」。「言語と文化」の科目。
この教育理念は、1991年4月に、いわゆる言語教育の担当組織として「言語文化部」が、「教養部」から分離独立する形で発足したころからの理念だと思われる。
- 私はこの理念を支持。大学で行われる「言語の教育」は、そのまま、当該の文化に親しませる「文化の教育」でもあるべき。
- ドイツ語科、フランス語科、中国語科、「語学研修旅行」を実施。
標準の語学教育を一年以上受けた後、二、三週間、学生を現地に送って言語の勉強をさせる。
この研修の事前準備として、後期には「文化事情」という授業を実施。

フランス語科、フランスに関係する研究をしている名大の各部局の教員が、一人一回の授業を担当するオムニバス形式の授業として実施。大変好評。

この授業は、フランスの文明・文化のさまざまな側面を、はっきり明示的に教えよう、紹介しようという授業。

名古屋大学の言語文化科目—一般の語学授業

▪ 私たちが日々行っているフランス語の授業～「言語文化科目」

「文化の教育」という性格も持つ。

ただし、明確なテーマ設定、時間設定はない。

語学の授業の中で、語学の教育と並行して、「文化事情」の授業に比べれば、より隠れた形で行われている。

フランス語科のそれぞれの先生がそれぞれの専門を反映させた形で行っている。

「文化の教育」へのフランス語科の取り組み

- この文化の教育へのフランス語科の取り組み。

中規模の語学科。そのメリットの活用。

現在のメンバー: 文学系2名(田所、飯野)、語学系2名(藤村、奥田)、社会系2名(鶴巻、新井)、自然系1名(ボーメール)。

これら教員が、フランス語を教えつつ、その授業の余白部分で、それぞれの専門知識に裏打ちされた、フランスの文化・社会の紹介を行っている。

一人の学生はすべての教員とは当たらないが、フランス語を一年学ぶ理系学部の学生は3人の教員、二年学ぶ文系学部の学生は5人の教員と当たる可能性がある。

- 構成員の数が少ない一部の語学科？

専任教員が少なくても、各科とも非常勤教員がおり、非常勤教員も含めて、バラエティに富んだ文化教育は実現されうる。

語学授業内の文化教育—私の場合

- 以下、フランス語科の一員としての私が、実際に授業内で行っている文化教育を紹介する。

語学授業内の文化教育

—私の場合、(1)中級フランス語(講読)

- 中級フランス語(文系学部生向け開講)の場合。授業の自由度が高いため、授業内の文化教育は、初級に比べ、より直接的に実施可能。

開講形態、受講形態： 前期・後期に、それぞれ中級クラスを4～5クラス開講。学生は自由に一つの授業を選択して受講。

授業内容： 他の教員の授業内容も見ながら担当者が各自決定。あらかじめシラバスで公表。

私の場合： 他の教員の顔ぶれを見て、許されると判断した場合は「講読」の授業を実施。

この場合、講読するテキストの選択から文化教育は開始。これまでのテキスト： ナポレオンの生涯、フランス革命、画家ゴッホの生涯、印象派画家の歴史、ビュートルの北斎論、フランス人へのインタビューなど。

教科書向けに書き下ろされたテキストもあるが、近年は、作家ミシェル・ビュートルの北斎論(短編、ほぼ全編を半期で講読可能)、印象派の紹介者テオドール・デュレの印象派画家の歴史(部分的講読)といった、生教材を講読。受講者のほとんどがついてくる。

語学授業内の文化教育

—私の場合、(2)中級フランス語(会話系授業)

・他の教員との関係で、私が会話系の授業を担当することもある。
その場合、ネイティブか、それに準じる留学生をティーチング・アシスタント(TA)に付けて、その人とペアで授業を実施。

これまでのTA: フランス語を母語とするフランス、スイス出身者。教育をフランス語で受けてきたため準ネイティブというべきコンゴ、マダガスカル、セネガル、ベナン出身者など。

TAと受講生が、互いの文化と社会について紹介しあい、意見を述べ合う授業を目指してきた。

TAがフランス国籍ではない場合も多いが、その場合は、フランス語圏の文化として拡大してとらえる。

フランス語圏は、旧フランス植民地の場合も多い。その場合、フランス文明の下で生まれた植民地主義とその結果を考えることができる。多文化の世界を学生に実感してもらうことにもなる。

語学授業内の文化教育

——私の場合、(3-1)初級フランス語

- 近年、語学の授業にも折にふれパソコンを持ち込んでいる。
フランス文化に関わる画像や音楽などを流す。
フランス語科のホームページ(HP)、個人のHPを授業中に利用することもある。
- フランス語科HP:「フランス語のすすめ」、「フランス語圏と私」というシリーズに、法学、数学、医学、教育学、美術史、メディア論の教員から寄稿してもらっている。
これらを授業の中で紹介することもある。

語学授業内の文化教育

——私の場合、(3-2)初級フランス語

- 私の個人HP。
「フランス・ポピュラー音楽紹介」——大衆文化も重要。
「パール・ラシェーズ墓地等写真探訪」——フランスの墓地の写真は学生の興味を引く。フランス文化論の題材。
「モンリオールの不安と悦楽」——ケベックの文化はフランス文明の支脈。

～フランス語科や私個人のHPの記事は一種のフランス文化論。
上に述べた「文化事情」のオムニバス授業のWeb版。
適宜フランス語の授業の中でも紹介。
- さらに、授業の中では、折にふれてフランス文化、フランス社会のことを紹介。

文明史の視点を入れた初級フランス語教育

—英語との対照(1)

語学教育自体への文明史的・文化史的視点の導入。
教授者のフランス文明史に関する知識のフランス語授業への応用。

フランス文明史の知識。

—> フランス語の語彙や文法について、歴史にからめて説明。

—> 特に英語との関係。

二つの言語の歴史的関係に由来する文法上の類似、語彙の重なり。
~両方の言語を比較対照し、両方の言語の習得への相乗効果を
ねらう。

文明史の視点を入れた初級フランス語教育 ――英語との対照(2)

- たとえば英語とフランス語の語彙などの類似・対応関係。
 - (1) 英仏語には一目で語源を共有していると分かるおびただしい単語が存在。
 - (2) さらに、たとえば形は多少違うが、フランス語を学ぶ者なら誰でも経験的に対応関係にあると分かる英仏対応語が存在。← 文明史(フランス語史、英語史)から説明。

spice (E) -- épice (F), spirit – esprit, sponge -- éponge, spouse --époux (épouse), spy -- espion,

stage -- étage, state -- état, stranger -- étranger,

school – école, scribble (scribe) -- écrire

ここでは、英語の語頭における sp, st, sk の子音群とフランス語の語頭のép, ét, éc との関係が問題になる。

文明史の視点を入れた初級フランス語教育

――英語との対照(3)

- 大体、ラテン語において語頭子音群 /sp-, st-, sk-/ を持つ語に遡る。
俗ラテン語後期には、この語頭子音群は発音しにくかったのか、直前に *i* か *e* の母音が添加されたらしい。

例) ラテン語 *spiritus* → 古フランス語 *ispirtu(s)* (ホームズ、p. 52)。

結果: ラテン語に起源をもつ古フランス語の単語では、軒並み *esp-, est-, esc-* などの語頭音群が一般的となった。

フランス語で *e* なしの /sk-, sp-, st-/ で始まる語がないわけではないが、後期の俗ラテン語からフランス語に取り込まれたラテン単語は、*e* を語頭添加することが多かったらしい。

→ さらにフランス語の側では、*esp-, est-, esc-* などの語頭音群で、多くの場合、後に *s* が脱落。
結果として、

épice, éponge, époux (épouse), étage, état, étranger, école

などとなった。*esprit, espion* と、*s* が脱落していないものの中にはある。

文明史の視点を入れた初級フランス語教育 ——英語との対照(4)

- 他方、英語では、eのないラテン語の語形を参照したか、古フランス語の語頭を消失した結果、*spice, sponge, spouse, spirit, spy, stage, state, stranger, school*などが現代に伝わっている。
- *spell* (E) -- *épeler* (F)
この対応関係では、辞書によれば、この語はラテン語ではなくフランク語に遡る。
だが、ラテン語起源の語の場合と同様の変化を示している。
- 一方、eをもつ古フランス語の形態から英語に借用された語は、フランス語と同じ語頭音群を示した。これらは、現代英語へ *espouse, esprit, estate, establish, escalade* などとして伝わっている。
- 参考: U.T.ホームズ、A.H.シュッツ著、松原秀一訳『フランス語の歴史』、大修館、1974年 (U.T. Holmes, A.H. Schutz – *A History of the French Language*, 1938); 堀田隆一 英語史ブログ、<http://user.keio.ac.jp/~rhotta/hellog/index.html>,
特に <http://user.keio.ac.jp/~rhotta/hellog/2013-08-15.html>

文明史の視点を入れた初級フランス語教育

――英語との対照(むすび)

英語とフランス語を関連させて教えるための材料は他にもいろいろある。

こうした材料を利用すると、学生は、英語の知識の基礎の上に、かなり容易にフランス語の語彙や文法知識を増やすことができる。

これで終わります。ご清聴ありがとうございました。